



## 明治維新150年特集

# 筑前竹槍一揆と小野隆助

筑前竹槍一揆は明治6（1873）年6月16日から発生した大規模な一揆で、福岡県全域（明治6年当時は筑前国の領域に重なる）に及びました。一揆の起こった原因は、明治政府が近代化政策を短期間に次々と実施したことにより、民衆の間に不安と不満が広がったことが一因とされています。決起した一揆勢は、商家や近代化の象徴である学校、役所、電信、ガス灯、洋館、官舎などを各地で破壊し、

官吏を襲撃して死傷者を出しました。そして福岡県庁（旧福岡城三の丸）は襲撃され、ついには熊本鎮台（全国で6カ所に置かれた陸軍の軍事機構）の派兵という大騒動にまで発展します。この竹槍一揆の鎮撫側として奔走した1人が、太宰府出身の小野（三木）隆助です。小野は太宰府天満宮の社家の生まれで、明治元年の戊辰戦争に参加し、同年の佐賀の乱、同10年の西南戦争は政府軍として活躍します。

小野の筑前竹槍一揆における動向が明治30年「福岡日日新聞」に連載された「竹槍日記」という史料に記されています。

小野は当時、太宰府神社（現太宰府天満宮）の禰宜でしたが、旧藩士隊の大隊長であったからか、戸長らから御



笠郡における不穏な動きについて知らせを受けます。小野は福岡の元同僚の矢野尋六郎と相談し、県庁に向かいます。県は旧藩軍事総督である中村用六を鎮撫総督に任命し、本部を日蓮宗寺院勝立寺（福岡市中央区天神）に設置しました。各地に集合する土族隊は20余の小隊（1個小隊50〜100人）に編成され、小野・矢野らは大隊副官として作戦会議に参加しました。

小野と矢野は一隊を連れ、御笠郡米の山峠を越えて穂波郡内野宿に向かいます。鎮撫後、県庁に向かう一揆勢の急報を受けて鎮撫総督本部に戻り、一度はこれを防ぎますが、のちに、県庁は襲撃に遭います。この責任を取り中村が自刃するなどの混乱下に、小野らは仮県庁を福岡城本丸に設置して防備を固めます。以降、一揆は沈静化に向かいますが、約6万4千人が処罰されるといふ大きな傷跡を残しました。

小野はその後、明治23年の第1回衆議院議員総選挙で福岡県第2区から当選し、同31年には第7代香川県知事を拝命し、政治家として活動します。太宰府天満宮の境内に、今も小野の偉業を記す石碑がひっそりと建っています。

太宰府市公文書館 篠崎 将貴